

反帝戦線

NO.17

69.1.22

社会主義学生同盟
全国委員会

▲1885年東大安田講堂銃撃と占拠の持つ意味と神田カルチエラタン斗争の中向的総括

〔1〕はじめに

社学同を中心とした革命的左翼は最後の一人まで果敢に斗い抜き、安田講堂を文字通り解放講堂として死守した。更に東大本郷地区一田の線争の戦いと併走して、神田地区においても我々のハゲモノのもとに二田間に亘って、兵力の勢力配置を分断し、社会的分業の実体的停止により、交通形態を麻痺させたのであった。この一連の斗いは、昨年、防犯方を中心とし、新宿周辺に於いて昂揚した凶斗争以来の日本新鋭斗争の發展局面としてあつた事を理解しなければならぬ。そして市民社会深部において、着実にしかも必ずや確実に未来への胎動が開始されている事を確信し、一連の斗争線争を物色化し、次なる飛躍への指針とする事こそ問われている事である。それは明らかに、必死防犯方斗争に典型的に表現された中央権力斗争の現在の形態と東大時計台陣地化に代表されるマッセントの形態こそが、それらの質的・目的意識的転化を媒介として、将来権力斗争にプロレタリア日本革命の型として、描定される事を意味している。以下、東大斗争における局面の歴史的反省を通り、我々の運動に組織論的理論的深化をしていく。

〔II〕 個別斗争と至人民的政治斗争

我々は、現在の世界体制と帝国主義を国際的・国内的危機の同時的発現局面として把握する。日帝においては、自衛隊のアジア派兵、沖縄核付き返還を直接的媒介とした国益国防を基礎にしたファシズムへの段階的推移を基本の特徴としてとらえる。(情勢分析に際しては、「共産主義」11期、仏論文参照)

その場合、過渡期世界における現代帝国主義の基本的特徴は、IMFの国際通貨金融に基礎をおく、諸制度、諸法規に支えられている。レーニンが「帝国主義論」を出した古典帝国主義段階においては、独占資本が個別的に個別資本を組織するのが基本的構造であつた。

った。それはレーニンが述べている如く、「帝国主義とは古い資本主義の上に立つ上層構造である。のだから、資本主義社会の資本的的商品生産に特有の産業資本を多く統合するものとしてあり、それは過剰資本生産をしてあげたことによる。従って、至者法則に従って資本が運動する時、それは必然である。併しながら、世界市場の發展と国際分業の發達により、また部分的な過渡期社会の發展により特徴づけられる現代帝国主義段階においては、単に鐵道、運輸等の組織化というだけでなく、また直接的に現実的な至者力による財政投融資だけでなく、管理通貨制度とIMF体制による諸制度を軸に、個別的独占資本の相互に、全ての独占資本を至体的に統合する有機的構造が特徴的なのである。

即ち、個別的独占資本が個別的領域において組織していったものが、今や至者力によって域に普遍に全体化され、政治至者体制全体に亘り組織化されるのである。個別資本内における個別的至者斗争が現在において至人民的政治斗争に發展するのは、この事に内在的根拠を有している。併し、かかる至者領域への組織化は、至者法則の貫徹による総資本の運動と必ずしも一致しないのである。至者法則は、つまり、これら資本へ帝国主義段階では殊に独占資本への過剰生産に原理的な根拠を持っているのである。そして、日帝においては、この様な傾向がより存在しているものであり、自己資本率の%前後という、必要資本率70%に到底及ばないという現状なのである。この様な中において、しかし、帝国主義としての本末性に沿って、日帝は地価、労賃の低廉性や資本の要求により、海外への資本投下は海外膨張に向うのである。かかる傾向は、現体制の下において

ては、愚無限的に自己資本率の増加に伴下という形態をとるし、最終的には矛盾におちつくのである。かかる矛盾への暴力的な排外的解決形態がファシズムという暴力に破壊的形態をとり、一巻に海外への侵略と抑圧と反革命の進行とこの現段階における準備が三次防による自衛隊強化と帝國主義軍隊化なのであり、沖繩派兵を媒介としたアジア派兵なのである。

この過程に到る問題として、政治斗争と経済斗争の問題が存在する。先に確認した如く、現在においては個別的な斗争が全人民的政治斗争へ飛躍する各観的根拠を有している。一般にIMFを暴軸として成立している管理通貨制度とそれを基礎として日帝にあっては、例えば物価上昇の中において、値上げをしても、管理通貨制度の下でのビルトインスタボライザーにより、あるいは帝國主義ファシズムによる至者政策により、直ちに物価が再上昇するのである。従って、各個別資本における賃上げ要求そのものは、必然的に管理通貨制度とIMFの存在そのものとの対決、言い換えればそれに基づいて成り立っている帝國主義そのものとの対決しなくては当然ながら物価上昇は阻止できないことになる。つまりは、個別資本内での諸改良を基本的任務とする経済斗争は、総資本そのものいよいよ之は実体的には国家権力自身との対決、政治斗争を自らの個別利害をこえた全人民的政治斗争として斗争のねはならぬのである。或いは、及なる意識性を基礎にあり、不断に個別資本との斗争の過程で、国家権力との対決を不断に物質化していくことである。(この事は既にASAPAC斗争の経路で基本的に確認していることである。そこでは、帝國主義海外膨脹と国内分業再編成と個別斗争の発生と普遍性を有するという形で解明された。個別経済斗争の場合も同様である。)

併し、現実的には、及る個別資本の件に基礎を有する斗争は個別企業、組合を基本単位とする、原則に組織されに総評一民同一同盟体により指導されていくのである。この政治的斗争のねは、より指導されていくのである。この政治的斗争のねは、より指導されていくのである。

るのをみても明らかである。併し、実は(二)にこそ、我々の提起するマッセンスト、ソビエト創造の意志と地区反戦建設の存在理由がある。これは正々復讐。

だが、自然発生的に創之は「賃上げ」を即自的戦術課題として立ち上ってくる場合、マルショアジョーは社会保障制度、失業保険にみられる社会政策をテコとして、斗争を賃金斗争の枠の中に押し込め様とする。だが、希論的にいえば、この過程を党の前衛が介入する事により、かかる自然発生的な衝突する様々な混乱に衝刺を突破すべく指導を及べなければならない。そしてそこには、当然ながら単なる個別的経済性のみが存在するのではなく、全人民的政治性も内包されているのは既に前に述べてある。更に例えは、具体的に東大斗争の場合を考へれば、医学部処分等々回を管む「七項目要求」なる改良的要求に基礎を置いて出発した斗争は運動過程を、運動斗争その自体の有するダイナミクスと党の介入等により、発展を遂げ、まさに全人民的政治斗争へと発展していったのである。これは、マルクスが述べた様に、自然発生的な運動の目的意識的な運動へ転化する過程を、自然発生的運動そのもののうちに、ある運動斗争の変化「を行むわけはならないのである。この「変化」の契機の一つとして我々の指した多岐時討台、鎖ひあつたことを挙げなければならない。

以上の様に、東大斗争を個別斗争説として抽象して考へた場合においても、明らかにそれは帝國主義の国内分業再編成と教育と国家権力による再編成である。即ち、東大の如き大学における学内研究の相対的自由に基礎をおく「自主規制路線粉砕」斗争説は、個別斗争説の解明とは決してならないのである。

客観的情勢と、革命主体の斗いにより切り開かれた地平は今や日本階級斗争体系を昂揚させている。かつてはローザ・ルクセンブルクは、経済斗争と政治斗争との関係を論じて、「政治斗争が昂揚する時は、経済斗争の昂揚する時でもある。」(ハマッセンストライキ論)とのことが、今や事実に以て語らねばならぬようになった。「現在の国際国内階級危殆と帝国主義ブルジョアジーの攻撃の性格を、一時的推進の圧力を背後にした、なしくずしの、アジア歩兵、ファシズム、統制経済確立」(E.S.M.P. 97)とする我々にとってこの様な時代においては、プロレタリアートの日常的利害に個別資本に基礎をおく個別利害は、直接的に、国家権力と対立し、経済斗争がそれ自身として政治斗争である方向性を有する。即ち、最終的にこの傾向の極限的展開形態であるファシズムのもとにおいては、統制経済への戦争中に於いては「総力戦体制」が従来の自由打撃力商販の販売を前提とした流動性が事実上存在、即ち、上部構造での暴力的転移と変革とそれに見合った物質的生産手段の組織化により、個別的労働が国家権力の全体的組織の中に包摂される事により、主観的生産手段そのものも物質的生産手段のなかに全体的に組織化し販属化されるのである。ここにおいては、プロレタリアートの個別利害と自らか、労働力商品を販売するという意味において「賃労働と資本」という関係に指定されて共同利害の差異が解消されて、個別資本の領域をこえて、総資本に国家そのものの下で全体的になるのである。「つまり、ここでは、資本への利害の共同性と個別性が自致することになるのである。

従って、ここにおいては、プロレタリアートの経済斗争は、いわば、直接的に同一的に、政治斗争になるのである。物質的生産手段の全体的組織性に対する斗いは、自己自身の否定的媒介を通じて全体的共同利害の否定に帝国主義(ファシズム)という特殊な形態をとる国家権力(そのものとの対立)になるのである。

そして、我々は、具体的には、現局面における日帝の基本的動向をかなるファシズムへの段階的推転への前段階にあると考え

るから、ますます熾爛に、経済斗争は政治斗争が昂揚し、あらゆる階級階級間の政治過程への登壇をうながすのは、明白である。東大斗争においては、個別斗争はその枠も全体的にもこえた全人民的政治斗争として、未だかつて、個別学闘斗争にかられなかつた昂揚を示した内在的根拠は、一つには今述べた現代帝国主義に特有な資本の論理に基礎を置きながら、資本主義の発展のテンポが既に過去の学闘斗争一般の時とは、異なつた段階に危機へ突入しつたあることを、意味している。二つには、こつしたものとして「入試中止」を媒介とした学内交通関係の学外への普遍的な外延化し市民社会への浸透により、「入試」という、幻想共同利害と個別的利害の対立による大衆の登場により、斗争の直接的主体の幅が拡大されたこと、等に、よりもたらされたと考える。

そしてかかる東大斗争の基本的位置は、解放が言う如く、「教育をめぐる労働者階級、人民の斗いとしての性格を著きはりにしている。」(革命2)として「全階級・全階級を包摂した斗いとして」あるのではない。「全階級、全階級を包摂するものは、世界史における市場の構造的変化にもとづく、国際分業体制の再編による日本帝国主義の海外膨張に国内分業再編により、もたらされる「相対的過剰人口」の生産による産業構造的変化に基礎を有するものとして教育に学闘の帝国主義的再編が存在するのである。従って、「資本制教育の根源的矛盾を学連・全労働者人民の現時的課題として突出」(革命2)するだけでは、「東大斗争の一つの特徴として斗いの中で研究労働者、助手等が重要な役割を果たしてきた」ことが、単に、「今日の研究教育体制のモツ

矛盾を突破せんとする斗いとして純化」(同上)とされるだけに留まるのである。問題なのは、解放派のここにもみられる軍マルとアブ口ジナルの個別現実として個別斗争詠を単に戦術的次元でしか把握しえない点である。

「研究仲間者、即ち」等の斗争参加に顕著なのは、単に解放派のいう「今日の研究、教育体制のもつ矛盾」を突破する意識性だけではない。まさに例えは東洋文化研究所助手有志(兵助寺14名中12名参加)の「声明」にみられるように、現在の体制「資本主義そのものに對する斗いなのである。であるからこそ、東文研助寺声明にみられる様に「あらゆる暴力的形態をとることも早開斗を支積する」という内容が与えられたのであった。決してこれらの階層を包摂する斗いか単に「反産協の斗いを共通項として、相互に協力し合う」(軍馬)のではない。カンテイカリストである解放派はこれら即自的存任として入寮である彼らにこの時点で既に起えられていたのであった。解放派が述べた様に「反産協の独自の斗い」による限り、入寮が存任している場所性に規定され、その本来の一面性のところで、その運動「行動が狭く限定されている訳だから、つまり現実的切實諸関係に規定されていることにより、それへの対応「斗いも「反産協」あるいは「反口入路線」(軍マル)という入寮の存在領域の範囲内における問題の指定は誤っている。一般的に経済斗争から政治斗争への転化の過程、この場目には、処分撤回、善後運動団体公認に端を巻いた果入斗争が、軍人民的「普遍的政治斗争」を発展していく過程では、入寮の自己内部において矛盾が発生するのである。即ち、日崩性と階級性への分裂である。従ってそれは解放派がいう様に「どう仕様もない日崩性への理髪として現われる学生存在、その中を貫く派属とそれ故の絶望の飛さ」(軍馬)は当然なのである。解放の「どう仕様もない日崩性」への存任を困ったものである。

(二)この問題、就中、日井は若くして、殊に解放派、軍マルと我々の相違はこうである。解放が常に強調する入寮の自然派長期的軍馬性は、入寮が自発的「自律的に、自己の存在」行動領域をこえるにしても、解放派即

ちいうなら「相互に協力し目」い、「未来をみつめて行く団結」による「果入斗争の軍馬的強化」のなかからでは、その運動の拡大は単に軍馬拡大にしかすぎないのである。我々が提起しなげればならないのは、軍馬拡大のなかに萌芽的「即自的」は場所的に統一されている質をいかにひきだすかであり、それが軍馬的には、反自理化、反産協をも実体的構成の一部とする日井打倒、安孫樹の斗争なのである。つまり、軍馬拡大「運動」の発展は互いであり、質的変化による運動の内延即「外延的」発展は、量が拡大していく場所そのものが変化していかなければならないのである。

のかるものとして、我々はより具体的にはマッセンストーンでエト詠を提唱するのである。(三)で展開する)として、その様な運動の発展「質的転化」の過程で、自己の行動「存在領域」を突破するとき、党が存任し、初めて飛躍することのできる。解放の如き、「前衛党否定」患者にはこの「処方箋」も「効果」かないらしい。だから日井「民権」にサンジカリストと痛罵をうけるのである。またこの様な我々の詠理を軍マルは内容を批判せよに「存任」主目的に歪曲された「(解放)」ものとしていられるが軍マルの「軍馬運動の場所的進取の詠理」(同上)こそ、現実の運動過程における戦術的課題の物質化「実体化」を基礎として、党「階級形成」をはかっていくという運動「組織」の必要を知らぬ党を建設すればよいという「観念的」理想を現在に投影する、「技術主義的組織路線」(社会党構成員)への「軍マルの批判」にすぎない、トニー・クワリフ派の「労働運動組織」主義だということを知るべきである。この様な軍マルは現実の運動展開や階級斗争の現実と何の関係もないことはいくらでもよい。

ない。革マル東大細胞が東大どの系立に悲観し、何もかもむなししいというのも無理ないことなのである。しかし自己否定しようとも機動隊の前では、ガバ棒をおっぼり出して逃げこしませう。(東大の革マルの言) 三派の戦斗性の構造がわからない。といった、聖命をやる気のない、小ブルエセイニテリのボグダートフ主義、チャイコフスキー主義者集団であることは今や東大の学友諸君のみならず、日本のすべての闘う人民労働者の前に明らかになってきている。革マル下部どの動揺とブントへの移行による早大細胞と東大細胞との対立をあくまでも我々は、徹底的に原則的理論的批判闘争を通じて進行させ、革命的解体・打倒するのが革命的左翼の重要な任にたつてきている。

この「エセイニテリ集団の動揺と悲観を尻目に次に我々は東大闘争において有していた安田講堂占拠の意匠を説明することにしたい。

Ⅲ マッセニストとソヴィエト論 — 安田講堂占拠の思想的意味 —

六月十五日の医学生と社会学同東大支部により封鎖された安田講堂は本年一月十九日、国家権力の手による反革命解除による社会学同部隊の全員検挙という不当弾圧に到るまで、市民社会内部における斗争陣地としての役割を果して来た。ここには、一月十七日以降の社会学同による安田講堂防衛占拠の持つ運動論的意義を説明したい。

安田講堂封鎖陣地化は、資本制的市営に基くおき、物質的諸関係に規定される社会的交通の分断と企業の一時的マヒであった。そしてそれは全体として物質的生産手段をコントロールする者が所有しているこの資本制社会内部にプロレタリア自己解放の概念を、市民社会内部に物質的基礎として生みおとしたといふことでもある。そしてそれは、地球規模を基礎とした従来の職能一差別をこえた地色ソヴィエト運動の発展していくものであった。(財反共戦線14)

我々は既に、東大闘争のより普遍化した全体的経路を昨年五月世界史上に所有している。フランス五月革命である。

ここにはフランスの五月の過程をまずとりあげ、その総括の反省を踏まえて、我々のマッセニスト論を深化する。(詳しい経路に關しては、ISMは号佐々木論文、三月二二日運動のコンビンディ、ソヴィエトの五月革命(参考))

フランス五月の激戦においては、まさにソヴィエト的なまきだしすらもみられた(トニークリフ)。CUT(労働者連立)、CFDT(統一社会党)らの斗争収約と妥協との非和解的対立のもとにおいて、「ガルピユスキュール」と呼ばれる学生運動諸党派のイニシアの下に行動委員が結成され、「六月の終りには、パリには約四五十の行動委員会があった。全国では数百が存在した」。(T.カルク「五月の敗北」) また、「青年労働者は、半年抑制の指導部を折して、工場ために行動委員会をストライキ委員会を組織し、斗いの輪を広げていった」。(ISM P. 56)

この行動委員会(組合下部組織ではなく、原則として「直接民主主義的手段で選出された代表から構成され、食糧配給制比の三至倍の状況の下において行なわれた)は、その指導も遂行していったのであった。

マッセニスト中のある場所、例えば、ナントやサン・テガール等においては、街工場全体の自主管理がなされ、物價管理、消費者への直接的食糧、物資の配給をこころしたのであった。

そして行動委員会、救急スト中心重要役割を果した労働者学生行動委員会(国)は、フランス五月革命の過程で、自身から積極的な斗争(ISM P. 57)を強化して、く鋭利となつていたのであった。

フランスにおいては、組合は企業別ではなく、産別が支配的であるから、同一企業工場に異なった教組合が存在するが、この「行動

組合の職制支配に對抗し、「ストライキ委員
会」を直接民主主義の下において選出し、こ
れを「行動委員会」を統一的に統合すること
により、地区全般への波及を追求していくこ
とを介して、地域マッセンストを全体として
実現していくことである。そしてそれは永続
的なる「コンミュニオン運動」として意識的に追
求されるべきではない。

「フランス五月革命」においては、この~~殊~~
に工場―地域での原則的組織活動を基礎とし
て、「ソビエト運動」のもとに、工場占拠運
動をしえず、同時に新左翼間の統一戦線の実
体的物質化の不在に表現される前衛党の問題
なのであり、それは「世界革命の展望のもと
でフランス国家権力の軍事外交路線に対する
全国民的分裂を形成しておくこと」ができず
「経済主義的に対処せざるを得ない」(「S
M.P.」)ことにあり、街頭での闘いを職場―
工場に環流できず、「ジトコパン主義的傾向を
有していた」ということだった。

即ち、中央権力斗争とマッセンストの問題に
は推定された「コンミュニオン運動」に統一性
を与える中央集権性、党的プロレタリアヘゲ
モニーが放棄されていったレーニン主義的原
則の否定とカルダンの単純生産管理プロク
力とする傾向がフランスの諸党派に支配的であ
った。

運動の系統的発展を考へるなら、フランス
の例をとるまでもなく、東大斗争における安
田講堂の最後までの占拠の持つ意味は重要で
ある。東大における闘いはマッセンストの持
続的追求の一形態であり、同時にそれは全共
斗↓全学評への転化再編による「組織的形態
」は供与はりにせよ、本質的リ象体的に「コ
ンミュニオン運動」の質を追求したものであ
った。そしてそれは昨年10月にティピカルに表
現された中央権力斗争や19に亘った神田
―お茶の水一帯の街頭バリ斗争と結合するこ
とにより、将来的に追求される日本革命の構
造的型―モデルとしての地域マッセンストと
中央権力斗争の現局面における追及の物質的
成果としてあった。それはフランス「五月革
命」での教訓たる「萌芽的自己権力を目的意
識的に組織させ、それを地区単位、県単位に

5/23

結合させた全国組織に発展させること、且つ
行動委員会の活動を生産点掌握から積極的
街頭斗争に参加させ権力中枢に対する攻撃的
斗争部隊に高めていくこと、その中で委員会
の武装をかちとっていく(S.M.P. IS)の現
实的な我々の運動組織論的成果であった。
この事の革命的意義を理解しようとして
じえないカント主義リ悟性主義者革マルは我
々の理論的主張を不ジまげて歪曲し、「反戦
青年委員会を... 街頭斗争村圍として固定し
「街頭斗争とみならず」(附放は)存どと「批
判」したつもりでいるが、もともと「大衆運
動と党建設の関連は強迫観念としてしか頭に
なかった」革マルは斗えは斗う程(実際は日
共以下のにも斗われない)消耗し、三派への
対抗関係でやり始めたエセ「大衆運動」の破
産とフラクシオン活動へ回帰するのモプロレ
タリア日本革命の目をまたずして近いことであ
らう。

先に「五月革命」の例で確認した林に今日
では既成左翼の、例えは労働組合に代表され
るタテ割制下での闘いは困難であり、総資本
が横に個別資本の運動を突进的に統御してい
く中において我々も「横断的組織」を建設し
ていかなくてはならぬのである。
我々はそうしたものとして「ソビエト」を
如何に追求していくのかという事を、既成組
合の下部村構ではなしに追求するのである。
そこでそれへの将来的構成要素の一つたる
地域においては、地区反戦にみられる「統一
戦線」の限定的形態を提起するのである。
決して、地区反戦そのものが直接的に「ソビ
エト」に移行するものでないことは百も承知
である。これは革マルが我々の中央権力斗争
とマッセンストの連関構造を把握しえない限
界と我々に対する「せぬみ」から来る意図的
な悪意を歪曲であり、「地区反戦を街頭武装
斗争もしくは、(ウラにつづく)

革命の場を激化するための機関（解放的）
なことは一度も位置付けられたことはない。

それ以外、革マルはこの様な主張は右翼的なの
である。むしろ「こうした産業（註民間

大産業）において、社共とりわけ日共はか
なりの方量をもっている。だからとりつて

それらが全体として労働戦線における既成指
標の下で労働の左翼的展開と革命的運動の

統一の達成に直接つながらない。またそ
の「統一の達成」の条件はみなさかす、

東地青年団と学生共闘の下の下に「東
地青年団の指導力」として運動を推進し

てきたことを我々やBはむしろ対する対応
の是非を問うか。緩り返さうか。現在の局面

の下で、互を逐へに稼に東京地評に代表さ
れる既成的組織の下では基本的に、革マル

のきつ「統一の達成」などは出来ないであ
る。我々はどうした展開をこえるものとして

「統一」をソビエト運動を提起し、一方革公
論的方針を叩きこいた既成組織への介入を

表明していきるのである。革マルは未だに「革
マル主義とは何か」「組織論的段階の独

立運動と加入戦術との統一として組織戦術を
展開している様だが、これは既に「理論戦線

」を日何論文によって既に我々が批判したも
のである。一度も展開したことがない「左翼

的」のつきあひは「巨變的展開」の具体的解明
をこえてもつたものである。いくら「のり

こえの構造」(9)を因式化してもそれは革命回
轉を感得へましますおちこんでいくだけであ
る。へ「日本の反スターリン主義運動」(11)

元来、「コンミンティーン」はパリコミュニ
の時、フランス革命の時、セクシヨンの伝統

を継承して「祖國フランス」をフロジヤレか
ら許るといった自然発生在在の中かり生れた。

レーニンがソビエト建設のイメージもマ
ルクスの「フランスの内乱」等に基礎をおき

たまわたりである。へE、H、カー「ホル
ム」は「革命」(1)参照)そして、L、トロ

ツキーが「文」は何かに等においてそれを政治
的組織の下において、整理し定義を身え

ていったのである。しかし、「ソビエト」は
革命の勝利権を奪取するにおいてのみ成立す

ると考へるには疑義がある。「思考が現実化
」に及んで、つぎにマツだけでは足りない。

現実及びならず思考にまやつぎすまなけれ
ばならない。(「法哲学批判序説」)のあること
日共スターリンニストマカント主義は「個性主義者」
で革マルは知るべきである。

ローザルクセンブルクは「一九〇〇年代
」において、大衆の自然発生性になり、激発的

にブルジョアジーに対して発生する、大衆の内
部での日漸性と階級性の未分化な爆発をマツ

センストの時期であると考へた。つまりロー
ザに下れば前衛による階級形成を媒介とした

のブルジョアリアート大衆の即自的反抗といわ
ば、全体的に集合的にマツセンストと呼ん

ど考へる。そしてこの様な大衆の自然成長性
を発展させ、持続させる組織形態としてレ

テリソビエトが考へられていた。

併し我々はマツセンストを必ずしもどうは
考へない。労働運動を基礎とする左翼のイニ

シアが全体的に社共がヘゲモニーをマツとい
る場合、ゼネストとものを革命的な裏が展

開出来ることはない。しかしその場合にも
「情勢に規定されて激発しているゼネストを

利用したヘマツセンスト」などマツことが出
来る。(「理・戦」日何論文)のである。

そして、地域マツセンストは内定として分
業生産の一次的停止をもたらし、革命時にお

いては部分的にせよ生産管理を破壊するもの
となり、東大斗争においては日何論文の完全

封鎖の貫徹は東大内における党内行政の心臓
部の麻痺による党内交通の停止、資本制的分

業の一次的局所的停止に表現される。形態を例
えば都市工科大学院の先進的學生による万

國博研究の拒否、東大斗争を媒介として十七
士年安保への意識的斗争という形で「学協同

」に代表される資本制的分業の停止が実現され
たのであった。

併し未だ至体として東大斗争は個別性の枠を
止揚し普遍性へ転化しても、その至体的基礎
は組織を保障し得なかつた。そのことは私的
に個別的利益に基礎をおく大衆の個別的利害
を止揚しきれなかつた限界性の表現でもあつ
た。

それは例をばプロレタリアートの二重性を
考へれば首肯せらる。つまりプロレタリアート
の「至面的に大衆の能力を發展させる階級」
（ドイツ）たる至体性が資本制的牙業の下に
おいては、労働商品たる私的商品の売買とい
う形態を一面的に表現されるからである。
即ち、自己の私的商品の消費であるという
ことに規定されて、他階級・階級との交換・
交渉においてますますその力が弱力になる
というところであり、かかる階級の受動性に規
定されたブルジョアの価値判断の発生を否定
していく為に不断的に階級形成がなされる
ことが必要なのである。一た一八年のドイツ
革命の終局的敗北もかかる私的個別利害の解
決を要するところでもなかつた大衆に於ては、

トロツキーの概念的定義の過時的現象的産
物なのである。「ソビエト」は一つの側面と
して確かに階級の枠内ではあるが、それは「
ソビエト」の発生の歴史的抽象を解明によつ
ても明らかにならぬ。またレーニンが論じて居
る「国家と革命」で言う様に「下層の自然
発生的組織」であるからである。併し「下層
の」自然発生的組織であることはその創造の
建設は目的意識的に「統一戦線の最高形態」
として、既成組織と異なつた運動の組織理
論として創造されるべきである。そしてそれは
同様に資本制社会の下におけるプロレタリア
ートの革命そのものを不断的に止揚していく為
の組織としても考へていかなくてはならぬ。
我々はさうした意味を求めて地区「コンミ
ューン運動」を境としたのであり、その現在の
「環境」を生産業における密着した運動の
地理的ストライキ運動として推進、中央斗争
と組織的・再生産（ISMIDP）する事
なりである。

レーニンが構成され、オプロイテとの革命的結
締目・統括をなす事が出来なかつた事に基
いていた。（二れの詳しい扱々の見解は 理
戦の波多野論文参照）

レーニンは一九〇五年以降の「革命の境
性」が後退し、革命的段階に至体として入
った時にも各種の運動を「機動的」に統括して
いく事を強調したのであり、さうした目的
としてロシアに於いて「ソビエト」を創造して
いく事を事実上提議したのである。我々も
レーニンを継承して、既成組織への我々の介
入と我々の主体的運動と運動形態を二重的に
追及していくなくてはならぬ。何故これが
極左的ハネ上りを意味し本質的には無力な運
動にすぎない（解文四）か。論証して欲しい。
軍マルが言っている事は「解密的規定を現在
に投影しこれにより然らざるに在り」
出す」とか批判して行かないのであり「ソビエ
ト」を相変わらず権力斗争・革命的階級（二
れの規定するに於いて）に創造されるべき運
動と考へる「トロツキー・ドブマキヌ」は

東大斗争における個別斗争の発展・牙業の
停止は実体的内容として「マンロー」を要
し、その裏面「ソビエト」への回帰を要して居
た。何かしら「ソビエト」を革命階級に於
て生み出さなければならぬ。この運動の
際には功益するものは産業であり、産業の功益
が「ソビエト」を必要とする。被支配階級
階級として解体させる「ホルカー」市面性
を止めしている時、不断的にこれらと斗争の対決
していく物變的夏戀を市民社会内部に構築し
ていくことを追求する事が必要なのである。
ドイツ革命に於けるローゼンバウムの「プロ
レタリアートの自然発生的性による革命性への期待であり、
未組織の未訓練の即自的プロレタリアは「革
命の進行の過程において発生する、特殊の階
級」を解決する手段をもたない。従つて革命

を永続的に闘う事が出来ないという事に無知
だったことによる。そしてこの様な傾向に対
して我々は前段階における不断的階級形成の
物質化をはかりつつ、ブルジョアジーによる
「プロレタリアートの階級として解体させ
」結合している社会的諸条件を分解させ
る。主要方向に對し「プロレタリアートの政
治闘争の本質がこれらの解体や分解と対決す
ること」(「フルカー411」ニニ論)が要
求されるのである。

東大斗争は、まだ市民社会の全体
的秩序の破壊による政府危機から全的政変を
待へと進行してはいないが、それは事実とし
て、将来権力闘争の型を指定した斗争として
あることを確認しなければならぬ。
即ち全国各地における学園斗争を中心とした
「セントロ」から質的にも「ソビエト」を造
り出すものとしての「全国学園共闘」結成に
よる全国的横断化とはかつていくことである。

④ さらけに

東大斗争は単に、学園斗争の枠内において
「学生」により斗われただけでなく、総体と
して革命的プロレタリアートにより領導され
たものであり、本質的に生産系におけるプロ
レタリアートの工場占拠と同一的内容を有す
るものであった。として我々は何れも、東
大斗争を世界革命の展望の下で闘うことを要
求しなければならぬ。どうした戦略意識
性こそ、世界一國同時革命であり、世界反
帝統一戦線のもと全世界の闘う「世界赤軍」
のもとに有機的に統合された世界革命戦争形
態を準備することであり、世界一國党建設
の「なか」に「意識」の物質化をはか。ていく
こととなければならぬ。諸党派は互にこれ
を求めてくる。少くとも一年は我々のあとに。

定田謙堂占拠の時の各派の小ブル的批難は今
どこにも。昨年、「ドブレゲリ」路線の直輪、
のカルネエラタン斗争(革命的)などとい
た各派の「小見病」的対応は今どうして線格
したのか?とに。我々は未だか。マ。な。か
た階級斗争の昂揚と「革命の現実性」を論
争に確信し、カント主義「悟性主義者」
の「ヘーゲリアン」単純実力斗争主義等の
「田」の論党派の動搖を尻目に最後まで定田謙

堂でよい扱いた。社会闘争を中軸とする革命的戦
士たちと共によい統一闘いようではないか。

補 個別斗争の論理の総括

① 軍マルの学園斗争論のあやまりに關して

我々がこれまで個別斗争の論理として確認
して来た内容は、ほぼ次のようにまとめられ
る。

- ① 個別斗争への場合には学生の諸教育闘争
争にとどまらず、プロレタリアの賃上げ斗争
をも含むの過程においては、大衆一般は改良
の果実の獲得をめざして斗争に決起し、その
ためには何処々の大衆斗争機関に決集して斗
う。革命的前進は大衆に改良の果実を提起し
つつその獲得の過程で、来るべき権力斗争を
担いうる斗争主体も党の拡大発展を追求する。
すなわち大衆の階級への形成はかりつつ来
るべき権力斗争におけるプロレタリア権力の
実体としての市民社会内部でのプロレタリア
への「エー」の確立を追求する。それ故、革命
的前進を論理化しとらえねばならぬ。かくて戦
術は、②改良の果実獲得のための斗争戦術。
③党の拡大発展のための組織

修

戦術 ④市民社会内部でのプロレタリアへの
二一確立のための組織戦術の三つである。
というようなものである。(理論戦線七号)

この場合我々には前提的に④改良の果実の獲得は実際には不可能であるということ、早
大学闘争、明大学闘争の総括として確定し
ていた。即ちそこからそのような意味での革
命的敗北主義の立場を、個別斗争における我
々の主体的な立場としていたことをふまえて
なければならぬ。このような三つの物質的獲得物の対象化をその内容とした論理において
さらに補充され、総括されるべき点は何か。
我々は次の事を確認しなければならぬ。

まず第一にこのように相対的設定は、あの
いまのしき革命的図解主義者、或いは又小ア
奇想集団の革命マニヤと同じように個別斗争の
党形成なる論理とより遠えられてはならない
といふことである。

即ち革命マニヤは言う。「個別斗争には個別斗争の論理がある。個別斗争には、来るべき権力斗争を斗い抜ける党の形成を、階級斗争の内延的な発展過程の追求に組織の組織化として、運動の組織化の区別と連帯性のもとに、とりえかえさねばならない。」(解放一七八号) 或いはもつと言いたいことをズバリと言っているものとしては、革命的プロレタリアとしての我々が大量運動を展開するのは、ただ革命的プロレタリアを生産し、組織的に結集するためにこそするのである。「ハースター六六〇」といふ頁がある。

斗争戦術の左傾化、暴力化が直接に即自的プロレタリアの革命的プロレタリアへの形成の過程を一致するものでないことは自明である。だから大量運動の外延的な発展過程とは相対的に独自のものとして、即自的プロレタリアの革命的プロレタリアへの形成を対象化すること、すなわちそれを組織戦術として斗争戦術との区別を連帯のもとに位置付けるべきこと、これも一般的には決して譲りではない。革命的組織戦術主義の誤りは、彼等が組織戦術の党形成、階級形成の階級意識の形成とのみとらえる点にある。この点に對して我々は次のようにとらえなければならぬ。

階級斗争の内延的な発展とは党の形成拡大の
みおしと定められるべきでなく、いわんや階級形成とは階級意識の形成に至少化されてはならない。

階級形成とはこれまでの一切の世界史の人格的反映、丁史の具現物としてのプロレタリアの自己対象化、すなわち現実的普遍としての彼等が自己史の丁史的、論理的木道を認識し、そのことによつて全世界をイデオロギーに獲得していくことを媒介として、現実の市民社会の深部にそのような自己の存在をプロレタリアへが二一として確立していく事を意味している。

階級形成は来るべき共産主義社会の萌芽としての革命的プロレタリアの陣地の形成である。このことは直線的に党の形成に結びつけられてはならない。このような革命的プロレタリアの陣地の形成は、権力斗争におけるプロレタリア権力の社会的組織的形態のソビエトの確立との連帯相違のもとにとらえられねばならない。すなわち即自的プロレタリアの自己対象化は物質化された内容として、プロレタリアへが二一として表現されねばならないのである。このプロレタリアへが二一論を欠落させたまま、党の発展拡大をのみ一面的に追求する革命マニヤは、それ故全くのセクト主義、至めりれた前衛主義にいつでも転落する。

東大斗争の一月段階における対日共との下ル下の放棄、安田講堂の放棄は正にその証である。それは彼等が党の形成発展をプロレタリア権力論との関連でとらえていないからに他ならない。すなわち、現在の個別斗争の過程で来るべき権力斗争を担いづる斗争主体を作りあげていくといふことは、④党の形成、質的な発展と

④市民社

党内部での革命的プロレタリアのハゲモニー形態の確立のことは長ならないといふことは、プロレタリア政治革命が社会革命の質を内包したものであることを示すかえされるべき必然性をもっているからである。この政治革命と社会革命の連関構造に關しては、前次的に次のことを述べねばならない。

プロレタリア政治権力が何故プロレタリアの生産管理にプロレタリアによる物質的生産手段の占有を物質的基礎として成立しなければならぬかというならば、そのよきならば口独自体が過渡期社会から生産手段の第一段階への過程に於る否定的媒介としての存在ししかもそれは共産主義の第一段階に於る国家の止揚に階級の廢絶とともに消え去るべき運命をもつてゐるからである。すなわちプロレタリアによる政治権力の奪取は、明らかにそのあらゆる政治権力の存在の止揚に向つてはならず、それは派通關係が生産關係を決定する価値法則の止揚として表現されるのであるから、政治革命そのものが社会革命の萌芽として存在するためである。

だがその場合にも「最も支配的な意識が最も支配的な物質的諸關係の觀念的表現である」、物質的生産手段を所有する人間に精神的生産手段をも又所有するに限りにおいて、あらゆる革命はそのような物質的生産手段の所有のためのプロレタリアの生産管理にストライキや政治権力の打倒として、すなわち政治革命としてまず表現されるということである。それ故に、政治革命が社会革命の質を成すとしたものとして存在するということ、すなわち革命が社会革命に先行するということとは、上で区別と連関のもとに考えらるべきは、さうな

我々の革命的プロレタリアとしての具体的な立場は資本論を普遍的な理論、レニンの四主義論を特殊な階級論として捉え、ついでに代帝の主義論を個別現象論として現に過渡期社会論との連関構造の中に革命論に構築すべし、それ故に革命戦略としては現代過渡期世界に於る世界一國同時革命とその戦略論一の發見とする實力主義の立場なのであるが、このさいのわけて「革命」の概念は、なる政治権力の移行にとどめられるべきではなく、この

移行を量的に担うプロレタリアハゲモニーの確立をも含めたものとして規定されるべきではない。この場合、前記したプロレタリアの革命の表現として、革命的プロレタリアの二階級革命戦線を大衆の自己なるもの（象徴）に於ては、価値判断はあつても自己論的なものではない。大衆は社会的諸關係の象徴として、この物質的諸關係に直接的に規定されるべきを、自己の価値判断に資本制的生産判断として有しているだけである」と無謀的につけ、さうであるならば、青解的自立論は現在の情勢における大衆の組織化の困難性にかゝつた大衆の自然發生性への再臨の一形態に代わらない。

我々としては革命的プロレタリアとしての我々自身は主体であり、大衆は我々にとり及ぶの對象として客体として描き出されねばならず、かゝる我々をとりまく對象の変革が同時に自己の変革にプロレタリア解放の過程として社会の諸關係の変革に規定されるべきである。すなわち人間解放の過程として、さうしてこの對象の變革の中に、新たな物質的諸關係が規定されるのである。その新たな物質的諸關係が市民社会の深部からプロレタリアハゲモニーの形成として、すなわちプロレタリアの形成、アートの形成にその物質化を以てした確立の確立として考えられねばならない。プロレタリアアートはその存在に於るその階級をなすことに、より内的に発するその階級である。その存在に於る外的な現象としての革命の過程は、プロレタリア権力の社会制の

実体であり、結局それはソヴェトとして表現される。そしてそのソヴェトは過渡期

社会から社会主義社会への発展を社会的生産過程の一環として想うものであり、そこでは適時的生産は権力主体そのものなのである。

これ等の点から我々の志向すべき革命は社会革命の質を正確に内容した政治革命として現在の運動の過程の中を来るべきプロレタリア権力の実体を作り出すものとしてななければならない。それ故階級形成とはプロレタリア・ヘゲモニーの形成として考えられなければならないのである。

だから革マル派が東大斗争の後退局面においてこのような否定的現実をふまえてつづいてを切捨つべき方針を提議することなく、彼等のこの中央委において早く敢て北進言を田舎し、「これからは組織戦だ」と言明した。この遺産は、彼等の個別斗争論なるもの、そして党の組織論そのものの彼等の若菜である。

彼等は④階級の形成を意識の形成としてのみと見え、⑤それ故そのような階級の形成は党の同じ田舎大論とおおしくおもしろい。その結果社会革命の質を内容した政治革命を表現する為のプロレタリア・ヘゲモニー論としてのソヴェイト論が全く欠落した。④結果として党が回家へと、かわるという。また即目的なスタ革命論者にもおもしろい。スタ・スターリニスト革命論なのである。彼等は、東大斗争の過程で個別斗争=党形成という革マル理論が完全に確立し、空中分解してこのことを十分に確認し、史上三度の目の玉の市場再分割の南進ヤレた今日に於ける学闘斗争論・即ち自由権民主主義の対外表の為の国内社会的分業の再編、支配階級再編の一環としての大学の帝国主義的改編の斗争としての、教育学闘斗争論の更新を、その徹底したラジカルな実践と求むべきである。

◎ 社学同入ヶッコーレ

2月4日 沖縄斗争・東大奮闘
東大安田講堂内集会追及、これが不可能な場合は中大庭後集から沖縄斗争として、再度のカルンエラタンを。
この2月4日の東大・沖縄、為闘勝利全国後退斗争に際しては、速ちにさくし全国運動の2月4日より内容を提議する。

◎ さく全国留守宿 3月前半予定

◎ 理論戦のつて 2月末の発表予定

◎ 全国のさく学校主催の抗議集会 後退た、支那の状況と闘争を

東大先年作の8月25日からの1ヶ月
明大造船部新すて
2月4日 03:29 9/156

◎ 2月3日
東大斗争報告
全国学闘斗争勝利
沖縄斗争勝利
全都学生抗議集会
P.M 5:00 中大講堂
全学闘争
全学闘争
全学闘争
全学闘争